

---

# ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精靈体達は大忙し！後編

鷹嶺綺羅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精靈体達は大忙し！後編

### 【NNコード】

N5860E

### 【作者名】

鷹嶺綺羅

### 【あらすじ】

メサイアの擬似人格“精靈体”彼女たちは以外と大変なんです。  
ある日の出来事の後編です。

精靈体達が美鈴にシメられている丁度その時、ハンガーに入ったのは都築だった。

「……ったく」

血らの愛騎の足下に来た都築は、ため息まじりに頭を搔いた。

「しょうがねえか」

舌打ち一つ、都築は床を蹴り、コクピットハッチに移動。コンコンと、ハッチを軽く叩いた。

「十六夜？聞こえているか？」

メサイアの中からの返答はない。

「……十六夜？」

都築は、まるで田の前に十六夜がいるかのよつこ、優しく語りかける。

「話がしたいんだ……頼む。ハッチを開けて、顔を見させてくれ」

返事はない。

ハッチは開かない。

機械の作動音に混じって、どこか遠くで女の子達の悲鳴が聞こえてくるだけ。

「……十六夜」

それでも、都築は諦めなかつた。

「俺のこと……嫌いじゃなかつたら……」

まるで恋人に語りかけるようなその言葉の先には、冷たい装甲。それを貫くのは銃弾でも剣でもない。

言葉だ。

「開けてくれ」

ハツチは開かない。

だが、都築は不思議と、ハツチが開かれるとわかつっていた。  
生死を共にする世界を共に駆け抜けた者達同士のシンパシーかとも  
思ったが、どうやら違うらしい。

不思議な感覚が、都築に告げたのだ。

大丈夫だ、と。

だから、都築は確信していた。

このハツチは開く。

そう、確信していたのだ。

…………  
ピッピッピッピッ

周囲に響くコクピットハツチ開放警告音。

それは、都築の確信を裏付けてくれた。

「ありがとう……十六夜」

都築は、「クピットへと潜り込んだ。

丁度、その足下では、美鈴から解放された精霊体達が集まつつ  
あつたのを、当然ながら都築は知らない。

「どうすんのよー」

涼が鈴に怒鳴った。

「アンタがバカやつてくれたおかげで、とんだ迷惑だわ！？」

「な、何言つてんのよ！先に手を上げたのはアンタでしょう！」

「やめなさい一人ともつ！」

「乃衣姉！止めないで！」

「ここで白黒つけてやるんだからあつ！」

「やめて二人とも！美鈴様がまた動いたつ！」

「……」

「……」

「……」

「まあ、何だ」

ハッチの閉まつたコクピットの中。都築は十六夜の小さな体を抱きしめていた。

細い体が小刻みに震え、しゃくり上げる声が耳元に届く。

泣いた子供をあやす父親とは、こういふものか。

都築は一瞬、そう思った。

「失敗は誰にでもある」

「ヒック」

「失敗したら、失敗した分だけ頑張れ」

「……でも、でもお……」

「大丈夫だ」

都築は十六夜を抱きしめる腕に軽く力を込めた。

細い体は、思つたより柔らかい。

美奈代を抱きしめた時とは違うといえば違う。だが、全く別なともいえない、不思議な感覚が腕の中から湧いてくる。

「俺が側にいる。いつだって一緒に、俺がいるから」

「……都築……さん」

「俺達は、どこまでも一緒に……十六夜」

クサイセリフだと思つ。

陳腐だと思つ。

馬鹿馬鹿しいにもほどがある

そんなセリフだ。

だが

「そうだらう?」

それを違つと否定するつもりは、都築にはなかつた。

そして

「はいっ! -

十六夜はこの日初めて、満面の笑みを浮かべ、そして領いた。

「はあ……はあ……」

美鈴から散々シバかれた涼達はすでにズタボロだ。

「グスツ……せつかくのドレスがあ……」

ドレスの切れ端を握りしめながら泣き崩れるアルト。

「お……覚えてなさいよ? 一人とも

「な、何よつ!」

「私達が悪いっていつのー?」

頭にでっかいタンゴブを作った涼と鈴が他の精靈体達に取り囮ま

れ、青くなっていた。

「あんた達が余計な」「トするからでしょ」「うー？」

紗々（しゃしゃ）が顔を真っ赤にして怒鳴る。

「見なさいよ！アルトのドレス！どうすんのよ！アルト泣いちゃつたよー？」

「……わ、悪かつたわよ」

「でも……あれは美鈴様が」

涼と鈴は、口を尖らせながら小さく文句を言つのが精一杯だ。

「ああ。ほらアルト。泣きやみなせよ。ドレスはまた山崎さんに作つてもらえばいいじゃない。ね？」

紗々（しゃしゃ）はアルトをそつと抱きしめながら、アルトをやすやすと抱きしめた。

「山崎さんは、わかってくれるわよ。きっと、もっといいドレス作ってくれるつて」

「…………」

「ほりーーその一人、アルトにちゃんと謝んなさいよー」

「！」  
「…………」「めんなさい」

「わ、悪かった」

「…………」

「…………」「めんなさい」

同じ頃、十六夜もまた、都築に謝つていた。

「私……私、都築さんを殺しかけた。守らなくちゃいけない人達を、殺しかけた」

「…………そうだな」

十六夜を抱きしめる都築の指に十六夜の髪が触れる。

精靈体という擬似的存在とは思えないほどしなやかな髪を感じた都築の指は、そつとその髪を弄ぶ。

「じゃ、次は失敗しないようにしよう。失敗した分だけ、頑張って功績を立てよう。危険に曝した人達が許してくれるような功績を立

てれば、せつと許してもいいの」「本当?」

「ああ」

都築は軽く肩をすくめた。

「俺が言つただ。間違いないだろ?」

「……」

十六夜は、心底申し訳ないという顔で言つた。

「都築さんだから」

「ん?」

「信じられない」

「……どういう意味だ?」

「だつて……」

十六夜は不満げに頬をふくらませ、そっぽを向いた。  
不思議と愛らしくその仕草に、都築は気づかないまま、魅入られ  
ていた。

「プログラムミスしてばかりだし、命令聞き逃すし」

「……すまん」

都築はぼやいた。

「お詫びしなきやいけないのは俺の方だつたか」

「……まずは私」

十六夜はそう言つた後、言葉を詰まらせ、そして俯いた。

「でも……ね?」

「ん?」

「私……何も持つていない」

「お詫びや誠意は、モノで計るものじゃねえさ」

都築は小さく笑つて言つた。

「十六夜は言葉を持つてこる。お詫びの言葉はもうこらないつてくれ  
らこ、もらつてこる」

「……でも」  
不安げに顔を上げた十六夜は、都築の顔を見るなり、もう一度俯いてしまった。

その頬が赤く染まつたことに、都築は気づいていない。

「大丈夫だよ。十六夜」

「……」

「ん？」

十六夜は、思い切つたように顔を上げると、顎をあげ、目を閉じた。

「十六夜？」

都築は、その意味がわからない。

「……あげる」

目を閉じたまま、十六夜は震える声で言つた。

「私の……ファーストキス」

「……」

「……」

啞然とした顔の都築は、笑つていいのか呆れていいいのか、十六夜

から出した言葉へのリアクションに完全に詰まってしまった。

「……いや……あの……な?」

「……私のじや、いや?」

「いや、わいせ

「私のファーストキスなんて……意味ない?」

都築にそう訊ねる十六夜の瞳から、大粒の涙が一筋、こぼれた。

「……いこいと教えてやる。十六夜」

「?」

「実は俺も……初めてなんだよ。キスって」

「え?」

驚いたまぶたをあけた十六夜の瞳の前には、今まで見たことがないほど近くに都築がいた。

今まで見たことがないほど、その顔は優しく自分を見つめてくれていた。

そして

「……んつ

唇同士の触れあう感触に、十六夜は全て任せ、瞳を閉じた。

「もう最終手段っ！」

そう怒鳴つたのは乃衣だ。

「いい！？もう時間ない！最終手段に出るー。」

「最終手段？」

「みんなで力あわせて、コイツに強制ハッキング。んで、ハッチ強制開放したら、コクピットに隠れている十六夜を引っ張り出す！」

名付けて、天の岩戸作戦つ！」

「ちょっと違うと思うけどなあ……」

「夏姫、全然違うんだよ

「何よーやるのー？やらないのー？」

「っていうか……それ以外ないよね？」

「さくら、そういうことよー。」

「じゃ、やりましょー！」

精靈体達は同時に頷くと、都築騎のコクピットハッチの周囲にとりついた。

「準備いい？」

「十六夜、電子戦は得意だから……気合い入れないとね」

「じゃ セーの！」

周囲のメサイア総かがりのハッキングが都築騎のハッチを開放するためだけに行われた。

そして、ハッチは精靈体達が拍子抜けするほどあっせりと開放された。

「十六夜、何の抵抗もしなかったよ？」

「もう寝ちゃったかな」

「バ力 十六夜？」

最初にハッヂの中をのぞきこんだのは、紗々(しゃしゃ)。

「ほりあ。いつまでも……つて」

「何してんのよ。ほら、どきなさこよ。十六夜?つて!ー?」

「鈴、何して ええつー?」

「何?うぞおつー?」

「う……うわ……」

「い……十六夜?」

驚きのあまり、言葉を失う精靈体達の前には、めざす十六夜がいた。

都築とキスをしたまま、あまりのことにして凍り付いた姿勢で

「十六夜つ！ちょっと待ちなさいよー。」

「ふええええええええんつー!」

「泣いてないで教えなさいつてばー!」

必死にコクピットハッヂを閉めようとする十六夜だが、他の精靈体達総掛かりのハッキングにそれもままならない。

「キスしたんでしょうー?」

「もうやだああつー!」

「だから教えてよおつー!」

「ねー?キスつて何味だったのー?レモンー?イチゴー? えてよおつー!」

それから数日の後。

鈴谷に着艦、システムを停止した都築騎のコクピットの中。

「コクピットを出ようとする都築を、十六夜がもじもじした顔で待つていた。

「ああ お疲れ。十六夜」

「うん」

十六夜は、頷くと、そつと都築に顔を近づけた。

都築は思う。

あれ以来、十六夜は人目がないとわかるといつもこうやって甘えてくる。

まるで清らかな浅瀬を連想させる十六夜は、泉とは違った意味で、都築にとって今や魅力的な相手となりつつあった。

どんな厳しい訓練も、厳しい任務も、十六夜のキス一つで乗り越えられる。

都築にとって、十六夜とのキスは何物にも代え難い特別な宝になっていた。

キスを求めているのは、もしかしたら俺の方かもな。

都築はそんな風に考え、苦笑気味に十六夜と唇を重ねた。

「あ……あのね？」

唇を離した都築に、十六夜が訊ねた。

「都築さん……」

「ん？」

「私の」と……好き?」

「当たり前だろ?」

再び重なる唇に、十六夜は嬉しそうに頷いた。

「うん!私も、都築さんが大好き!」

そんな十六夜のいる都築騎。

事態は、騎士動員法が成立した時に起つた。

成り行きといえば成り行きだつた。

だが、都築にも、調整のため、精靈体システムを停止していると  
いう判断があつたのだ。

都築にとっての誤算。

それは、自らの騎に引っ張り込んだ美奈代の肘が、精靈体シス  
テムを起動させていたこと。

つまり……都築と美奈代のキスシーンは、十六夜の目の前で行わ  
れたことになり……。

その翌日。

「おかしいんだ」

演習地に立つ都築騎のコクピットで、都築はしきりに首を傾げて  
いた。

「十六夜。とにかく、コクピットに入りたかつたら歯を磨いてこい  
つて。コクピット入つても、ここんとこお冠で……俺、何かしたか  
？」

「それどころじゃない！」

たまらずに怒鳴つたのは対峙する立場にいる美奈代だ。

「さつきから何だ！貴様の騎は一体！」

美奈代の声は恐怖のあまり涙混じりだ。

「出力が1500%越えただと！？」

鈴谷艦内で演習を見守っていた技官達はちょっとしたパニックになっていた。

“鳳龍”的出力、すでに“白龍”的30倍越えです！騎体が持ちませんっ！」

「何をした！」

「不明！ただ、演習相手が泉騎になつた途端…」

「都築騎、かかりますっ！」

ブウンッ！　ズガアアアアアンッ！

都築騎から繰り出された斬艦刀の一撃は、衝撃波となつて泉騎を襲つた。

「つ！！」

声にならない悲鳴を上げ、なんとか回避した美奈代だったが、その騎体は衝撃波によつて吹き飛ばされた。

「ちいっ！」

攻撃をかわされたことに、不快そうに舌打ちしたのは十六夜だ。

「あれをかわすなんて！さすが私のライバル！」

「ちよつと！」

さくらがたまらず十六夜に文句を言った。

「私を殺す気！？」

「恨むなら　あなたのマスターを恨みなさい。」

「言つてる意味がわかないよおおつー。」

メサイアの連綿と続く歴史の中で、この時から約200年間、決して破られるとの無かった“鳳龍”の瞬間最大出力値は、こうしてマークされ……。

「やはりすさまじこな！」

「この最大瞬間出力値がどうして出るか、どうしても究明するんだ！」

「はいっー！」

興奮する技師達の要請により、

「もおヤダよおおおつー！」

泣き叫ぶさくらは、美奈代と共に何度も演習の相手をさせられ、へたばつた美奈代を都築が励まし、それに答える中で、少しずつ二人の関係は進展

それが結局

「いい加減に　　都築さんの前から消えなさいっー。」

嫉妬に狂う十六夜をヒートアップさせまくる悪循環を産み出し

「しつとクイーン」

精靈体達から、十六夜がそう呼ばれる下地を作り上げることになる。

すべては、戦いの合間のこと。

その合間には、十六夜という、恋する一人の少女の一途な思いと、それに振り回される精靈体達がいたことを、多くの者は知らない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5860e/>

---

ヴァルキリーズ・ストーム外伝 精霊体達は大忙し！後編

2010年10月10日08時09分発行